



松山資郎 (1907-2000)

松山資郎さんを偲んで

由井正敏

岩手県立大学総合政策学部

松山資郎さんには2000年8月17日に、心不全で亡くなられました。御年93才であり、大往生であったと思います。本人はもう十分生きてと覚悟されてはいたでしょうが、日本の鳥学会、野鳥の会関係者にとっては、日本の野鳥界の生き字引と称された先達を失い、大損失であることは明らかです。幸い、日本の野鳥界の歴史と松山さんの活躍の一端は、ご本人の著した「野鳥と共に八〇年」(文一総合出版 1997)に書かれているため、部分的にはその経過や背景が分かりますが、しかしその裏に隠れていると思われる多くの事実は、もう誰も知ることができなくなりました。

松山さんはそれだけ凄い方でした。明治40年に佐世保に生まれ、開成中学では上野動物園通いをし、盛岡高等農林で獣医学を学び、卒業と同時に農林省の鳥獣調査室に入りました。内田清之助氏に師事し、伝書鳩事業、巣箱調査、標識調査、野鳥の餌調査などを精力的にこなす傍ら、日本鳥学会の例会や庶務に携わり、1934年には富士山須走で行われた日本野鳥の会第1回探鳥会に参加するなど、昭和初期の錚々たる研究者、文学者との交流を行っておられました。

戦後は、猟政調査室を経て林野庁の森林保護部局に勤められ、マツクイムシ防除や森林の野鳥保護などを推進する一方、日本鳥類保護連盟の発足、鳥学会誌や野鳥誌の発行に尽力されました。また、カスミ網復活反対の闘士となり、国会議員と渡り合ったことは有名です。千葉県行徳の新浜の干潟を守る運動でも荒垣秀雄氏を会長に引っ張り出すなど、陰ながらの支援をされました。

1968年に林業試験場を最後に退官後、すぐに山階鳥類研究所の事務局長に就任され、財務の建て直しや所蔵標本、図書類の整理を進められ、さらには山階、黒田両先生とともに、世界鳥類和名辞典の編纂に当たるなど、松山さんの業績はとどまるところがありません。これらの業績に対し、1962年には日本鳥学会賞、1993年には山階芳麿賞を受賞されました。

私が松山さんにお会いしたのは、1965年初冬に多摩の鳥獣実験場で当時の林業試験場鳥獣科長の池田眞次郎氏とともに、富士山須走の新しい試験地のことで相談したのが最初でした。腰の低い柔和なお人柄で、歴戦の勇士とはとても思えない立ち居振る舞いでした。翌年、私が林業試験場に入ってから3年間は一緒に須走に通い、標識調査や巣箱調査、繁殖密度調査などを指導頂き、大変お世話になりました。この試験地には浦本昌紀氏、樋口広芳氏、安部直哉氏、橋敏雄氏など多くの方々が支援に訪れ、夜ともなれば松山さんの戦中戦後の体験談に話が弾みました。その後も、松山さんには研究調査の面で数々のお心使いを頂きました。ここに深く御礼を申し上げます。

もう松山さんの柔らかなご尊顔を伺うことはできなくなりましたが、松山さんの鳥類保護に尽された信念は、その薫陶を受けた弟子達の心に永く残っていくものと思います。何より、松山さんの活躍によって守られてきた野鳥達の子孫が、松山さんに感謝しているに違いないことを確信して、お悔やみの言葉とさせていただきます。